新聞〝交流〟が野口鉱長に抗議

先の落盤災害で、かけがえのない仲間――吉田哲郎さんをうしなった職場十八分会（三川。電気）の悲しみは大きかったが、それだけにまた決意も固く団結し、とくに直接の災害責任者である野口三川鉱長の責任を追及するとともに、職場の保安確立をめざしがんばっている。次は、同分会が七月十一日（故人の初命日）に発行した新聞〝交流〟（NO・六四）の記事で、事実をあげて、はげしく野口鉱長に抗議している。

浮かばれぬ六名

鉱長は責任感じているか

怒りの記事

六月十一日、午後三時二十五分三川鉱の坑内で、角目枠の下で降水に濡れながらパンツアーコンベヤー敷設作業に懸命だった六名の作業員が、〈会社の〉全くの保安の手抜きから皆殺しされてから早や一月が経った。

初めての命日を迎えて、遺族の悲しみは深まるばかりであろう。

×

なんで電気工が、機械工が落盤で……。感電事故や原動機にはさまれた、ということはあり得るかもしれないが、完成された、安全であるはずの坑道で、安心して働けるはずの現場で、なんで電気工や機械工が落盤で殺されなければならないのだ。

炭鉱で、絶対に手抜かりの許されないのが落盤対策だ。炭鉱における落盤防止対策こそ最も初歩的なものであり、そして絶対不可欠な問題である。会社がこのことを全く怠っていたがために、今次災害だ。

断層は落ちるものと思うのが、炭鉱屋の常識である。にもかかわらず断層対策はうたれず、軟盤の上に立てられた角目の脚は、まさに豆腐の上に立った柱同然だったという。

まさに落ちるべくして落ちた岩であり、起こるべくして起きた人災であった。

×

現場の直接の責任者である野口三川鉱々長は、ごうぜんたる態度で、「断層、断層は落ちてないじゃないか。立体作業、立体作業は今後もやる」とうそぶく。六名も死亡させた責任感はみじんも感じられぬ態度で、分会員の抗議に対応する。

これが虚勢であることは明らかであるが、こんな姿勢の野口鉱長に憤りはさらに深まる。

合同社葬が行なわれた十三日、朝の繰り込み場での野口鉱長の話の内容は、犠牲者を悼む言葉や自らの責任を問う言葉より、第七次石炭政策答申を前にして、炭鉱のイメージダウンを心配する意味の言葉が大部分であった。

×

証拠隠しはかる会社――

遺体の取り上げがすんだ直後から、会社は第二次災害の恐れがあるからと、災害現場の取り明け中止をほのめかしてきた。

職組・三池新労も同じ理由で、取り明け作業に協力できない、と会社に申し入れた。

第二次災害は絶対に起こしてはならない。第二次災害を起こすようだったら、どんな行動も中止すべきことは当然のことだ。

だが、災害現場の取り明けは、災害原因をさらに確実なものにし今後の保安対策の効果を大にするものであるから、今第二次災害の恐れがあるなら、暫く時をおき、十分なる防止策を講じ、徐々にでも取り明けをするのが災害を起こした会社の任務だ。それを早々に中止することを表明した会社の魂胆は、災害原因の物的証拠隠滅のほかにない。

×

安全週間の第一日――。三川鉱ロッカー周辺には、祝典行進曲がボリューム一杯に鳴り響いた。六名の仲間が死んで二十日も経たぬのに、なんと無神経で、非常識で不謹慎な。早速鉱長に抗議する。

ああ――、この責任者にしてこの災害あり。これでは、六名の仲間の霊は浮かばれようがないだろう。

交流
No64
1981 7.11
発行 三池労組 三川分会 三池電気

611 三川大災害の問題点

炭鉱――落盤対策

断層は落ちるもの

7月11日は6名の方々の初命日です

野口三川鉱長に抗議する新聞〝交流〟

死没囚人労働者法要を開催

きたる八月十日午前十時から、大牟田市久保田町二丁目一の八の蓮心寺で〝死没囚人労働者法要〟が営まれる。これは大牟田囚人墓地保存会（代表―浦川守県議）が長年続けてきている法要で、今年は十三回目である。

周知のように、三池炭鉱（官営から三井経営にかけて）では明治―大正―昭和をつらぬいて、多くの囚人労働者が働いてきた。ひと頃など、炭鉱労働者の七割も占めたほどで、法要はその間の物故者の霊を慰めようというもので、同保存会は「一人でも多くの人のお参りを」、と呼びかけている。

燃えた働く者の怒り

諏訪・川尻地域、浴場問題で闘う

新港社宅の浴場統廃合（三川鉱の浴場を廃止して、三池港務所の浴場に統合すること。本紙前号の記事参照のこと）合理化に反対してきた諏訪・川尻校区地域分会は、会社が統廃合を強行した七月五日（日曜日）、三池労組の執行部・三池主婦会役員をまじえ、抗議の意をこめて決起集会を開き、このような不当な合理化を強行する三井資本を許さず、今後も闘う決意を固めた。

怒りは燃えた

諏訪・川尻校区地域分会は、浴場統廃合の会社提案が、①三井鉱山の「人、もの、カネ」を節約して、安い労働力で安い石炭を掘り利潤拡大をめざしての犠牲の強要である。②背景に、三井鉱業所の自家発電の建設、大牟田の浮揚に名を借りた三井の産業基盤の再編成である――と位置づけ、早くから反対闘争を積み上げてきた。

具体的にはステッカーをはりめぐらしては反対闘争を呼びかけ、また三池労組の宣伝カー〝はたかぜ〟をもって宣伝活動をくり広げた。事実の不当を暴露する、屋外写真展も行なった。

とくに、その道の専門家や政治局員に協力を求め、学習会を開き、闘いへの自信を深めた。浴場統廃合を含め、三井が操つる大牟田の浮揚策が、市民や労働者の生活向上とどんなに逆行するものか、わかったからである。

その結果、ステッカーの初めの「ゆっくりフロに入れてもらいたい」の訴えが、やがて「浴場統合は公害日本一のかくし芸」「私たちはサトイモではない、浴場統廃合反対」「会社の都合ばかりいうな、これ以上がまんできない」などに変わってきた。新港社宅に住む者は、組織の別を問わず一人ひとりが「がんばる以外にない」ことを知ったはずだ。

固まった決意

結果的には、三井資本は地域住民の意志を踏みにじって浴場の統廃合を強行したが、同地域分会は一人も負けたと思う者はいない。日経連はいっている――「合理化を実施したことがよいのではなく反対されないことが成功である。反対されたら、合理化が完成されても失敗だ」会社はきっと、こんどの浴場統廃合反対闘争から、会社への働く者の怒りが高まることの恐ろしさを知ったことだろう。

また同校区地域分会に結集されている組合員も、今後はいっそう会社がおそれている自覚を高め、闘っていくことを決意している。

手記

何で原発は必要なのか

原子力発電の危険性学習して

職場25分会（本所） 浦川秀夫

原水爆禁止福岡県協議会、筑後地区実行委員会主催の「原子力発電所の危険性」についての学習会が、七月三日十八時より、久留米地域職業訓練センターにおいて催された。三池労組からは港務所の野田さんと田中さん、本所の中原さんと浦川の四人が参加した。

講師は久米三四郎・大阪市立大学教授で、時間が許す二時間余りみっちり、しかもわかりやすく講義された。満員の会場は、何度も場内整理をしなければならない程であった。

次は、その講義の内容である。

×

原爆と原子力発電は原理が同じで、〝原子の火〟（核分裂）のエネルギーの利用で、ウランやプルトニウム（核分裂性物質）を一定量（臨界量）以上を一つにすると発熱し（燃え）、あとに燃えた量に等しい〝死の灰〟（クリプトン・ヨー素・セシウムなど）ができる。

原爆では短時間にいっきょに燃やし（核爆発）、原子力発電ではゆっくり燃やす（核燃料）違いだけである。

長崎型原爆のプルトニウムは、原子力発電所の原子炉で燃やした燃料から化学分離（再処理）してできる。その量は、電気出力百万キロワット・一年間で約三百キログラム。長崎型の原爆の核爆発三十発分と約一トン（広島型原爆十発分）の死の灰ができる。

イスラエルが、イラクの原発を爆撃した原因はここにある。死の灰やプルトニウム（放射能）は厄介で、放射線障害を起こす。人間が、五感に感じない程度のごく微量なものでも影響を与える。

これらは、煮ても焼いても、自然の浄化作用でも無毒化ができない。また半減期（強さが半分になる時間）も、ヨー素八日、ストロンチウム三十年、プルトニウム二万四千年と気が遠くなるほど長いのである。

原子力発電所は、日本も世界も主流は軽水炉で、沸騰水型、または加圧水型である。

軽水炉はこじんまりした湧わかし型で、普通の水（軽水）を利用して、安上がりではあるが、弱点は小さい炉心から大きな発熱があるから、冷却条件が厳しい。高温（約二百八十度C）の蒸気をつくるために、原子炉に高い圧力をかける。圧力ガマの原理で沸騰水型七十気圧加圧水型百五十気圧である。

死の灰やプルトニウムをとじこめている燃料棒被覆管が高温（千度C以上）で水と激しく作用して崩れ、同時に水素が発生する。チャイナシンドローム（中国症候群）の恐怖のように、原子炉や配管の破損が原子炉水を噴出させ、原子炉の空だきが炉心（燃料棒）を崩壊・溶融し、放射性溶融物を流出させる。格納容器の破損は大量放射能の環境流出につながる。また地震にも弱い。放射性廃棄物の一部を環境に棄てると、「原子力発電所でも大事故は起こる」が、社会通念になっている。

エネルギー計画については、エネルギー需要の横バイ傾向、また環境を守るためには、エネルギー使用可能量に限界がある。

たとえば、科学技術庁報告（一九七六年）では、一九五三年のエネルギー消費の三～四倍が限度であれば、原子力発電所は必要ないのではないか。石油の次は原子力といわれているが、ウランは石油より早くなくなり、原子力は電力生産用の石油分しか代替できない（二五%）当面「原子力しかない」というのは、根拠のないものである。

われわれは、安全性が保障されていない原子力発電・再処理で核装備ができる原子力発電に反対し、非核三原則を守り、人類の破滅である戦争に反対し、全世界に運動を広げなければならない。

カンパ御礼

このほど、故・東実義さん（執行委員。六月五日、かねて入院中だった久留米大学医学部附属病院で逝去）の妻、啓子さんから組合旗とともに「CO患者守る会へ」と多額のカンパをいただきました。お伝えして、お礼にかえさせていただきます。ありがとうございました。

なお、別にお礼の言葉もいただいていることを記しておきます。

三池炭鉱労働組合